

本科 3 期 1 月度

解答

Z 会東大進学教室

高 1 東大国語



## 【問題】（演習）

出典：『今昔物語』／オリジナル問題

## 現代語訳

今となつては昔のことであるが、小野宮殿の御子に少将という人がいらつしやつた。この方は、佐理の大弐の父親である。ほんの少し病氣になつて亡くなつてしまつたので、小野宮殿が、（少将を）泣いて慕いなさることこの上ない。さて、少将の喪があける頃に、この少将の御乳母で、陸奥国の守の妻となつて、東国地方に行つていた御乳母が、「若君がこのようにして亡くなりなかつた」ということも知らずに、若君のことが恋しく（会えずに）寂しいという旨を書いて、若君に馬を差し上げたのにつけて、少将に御手紙を差し上げた。その返事を小野宮殿が書いて送つた。

「その人は、先日、ほんの少し病氣になり亡くなつてしまつたので、親の私が今まで生きていることが辛く思われる」とだけ書いて、歌を詠んで送つた。

まだ知らぬ……東国にはわが子の少将が亡くなつたことをまだ知らない人もいたのだなあ。それなら私も東国に行つて住めばよかったなあ。（東国にいれば今でも少将の死を知らずにいることができたであろうから）と書いてつかわされたのを見て、乳母はどのような気持ちがしたのであるうか。

## 解答

問 1 1 〓 けり 2 〓 けれ 3 〓 ける

問 2 (a) 〓 めのと (b) 〓 みちのくに (c) 〓 かみ

問3

① 〓 病気になって

② 〓 喪

③ 〓 さびしい

④ 〓 私

問4

(1) 少将の御乳母から少将に

(2) 小野宮殿から少将の御乳母に

問5

I 私も（少将の乳母のように）東国地方に行って過ごせば（住めば）よかったなあ

II 都から遠く離れた東国地方に行っているならば、少将の死を知ることが少しでも遅くてすんだであろうから。

## 現代語訳

延喜の帝が重い病氣におなりになって、いろいろな御祈禱や御修法、御読経などをさまざまになさるけれど、まったく病氣がよくおなりにならない。ある人が（帝に）申し上げるには、「河内の国の信貴山と申す所に、この長年来仏道修行をして、里へ出ることもない聖がいるそうです。その聖こそたいそう尊く（祈りの）効き目もあって、鉢を飛ばし、そうしていながら、めったにないほど尊く優れていることをするそうです。その聖を呼び寄せなされて祈禱をさせなされるならば、きっと病氣はお治りになることでしょうよ」と申し上げると、「それでは」とおっしゃって、藏人をお使いとして（その聖を）お呼びにやった。

（藏人が）行つて見ると、聖の様子は格別に尊くりっぱである。（藏人が）これこれの宣旨でお召しになるのだ、早く早く参内せよとの旨を言くと、聖は、「何のために召すのだ」と言つて、まったく動きそうな氣配もないので、（藏人は）「かくかくしかじか（帝の）ご病苦は重くていらっしゃる。（病平癒のために）お祈り申し上げなしてください」と言くと、（聖は）「それでは参内せずとも、ここにいたままお祈り申し上げましょう」と言う。（藏人が）「それでは、もしお治りになったとしても、どうして聖の効験と知ることができましょうか、いやできません」と言くと、（聖は）「それが誰の効験ということはたとえわかりにならなくても、（帝の）御氣分さえよくおなりになったならば、（それで）よいでしょう」と言うので、藏人は、「それにしても、どうにかして多くの御祈禱の中でもあなたの効験とわかるほうがよいでしょう」と言くと、（聖は）「それならばお祈り申し上げる際に、劍の護法を参上させましょう。もしかして（帝が）御夢にでも、（あるいは）幻にでも（その劍の護法を）御覧になれば、そう（＝病氣が治ったのは私の効験である）と御承知ください。劍を編んでは衣服にまといっている護法だ。私はまったく京へ出るつもりはない」と言うので、勅使は帰参して、かくくしかじかと（帝に）申し上げる。それから三日目の昼頃、（帝は）少しうとうとなさったかなさらなかったかという（夢うつつ）の中で、きらきらと光る物が見えたので、どのような物であろうかとお思ひになって御覧になると、あの聖の言った劍の護法である、とお思ひになるやいなや、御氣分がすっきりとなって、少しも重苦しいこともなく、ふだんのようにおなりになった（＝病氣がお治りになった）。

解答

問 1 (ウ)

問 2 (エ)

問 3 (イ)

問 4 (オ)

問 5 (ア)

問 6 (エ)

問 7 少しうとうとなさったかなさらなかつたかという中で〔24字・解答例〕

少しうとうとなさったかという夢うつつの中で〔21字・別解例〕

解説

問 1 読解問題。空欄に選択肢の語を一つずつあてはめてみる。文脈をたどりながら、場面や状況を正確に掴み、内容的に最もふさわしいものを選ぶ。

空欄を含む「それこそ」以下の一文は、信貴山に住む聖の説明である。「いみじく貴く、しるしありて」とあるように、この聖がたいそう尊く、祈りの効き目もある人だということがまず述べられている。次にある「鉢」とは「僧尼が施しを受けるのに用いる鉄製や陶製の食器」のことで、転じて「僧尼が経文を誦し、各戸の前に立ち、米銭などの施しものを受けること、すなわち托鉢、または、その受ける施しもの」を表す。そこで、「鉢を飛ばし」は、「家々を回って施しをうけることをはねつける、拒否する」意だと解釈できる。つまり、この聖は前の文に「里へ出づることもせぬ」とあるように、山に籠もったまま、施しも受けずに暮らしているのである。

以上の内容を踏まえた上で、選択肢を吟味していく。

まず(ア)を当てはめると、「さて出ながら、よろづありがたきことをし候ふなれ」となる。「さて」は、ここでは「そのまま、そういう状態で」という意味の副詞と考えられ、具体的には直前の「鉢を飛ばし」た状態を指している。すると、山に籠もったままの状態で外へ出かけるというのでは矛盾する。したがって(ア)は不適切。次に(イ)の「参り」は「宮中や貴人のもとへ参上する」意で、これも外出を意味するので、やはり不適切。(ウ)の「居」はワ行上一段活用 of 動詞「居る」の連用形と考えられるが、「居る」には「ある場所にじつと静止している、とどまる」という意味があるので、これは内容的に適切。(エ)の「ここ」は指示代名詞であり、単に「ここ」と場所を指示するだけでは、ここで何をするのかということがわからず、「ここながら」では意味が通じないので不適切。(オ)の「歩き」はやはり外を歩くことになるので、(ア)や(イ)同様、不適切。したがって正解は(ウ)となる。「さて居ながら、よ

ろづありがたきことをし候ふなれ」は「そのようにしているけれども、何事につけ、めったにないほど尊いことをするそうです」という意味になり、山に籠もりつきりであるけれど、また人から施しを受けることはないけれど、実に尊いことをする、ということで聖の特異性を表している。

問2 読解問題。空欄に入る候補として挙げられている古語の意味を把握した上で、空欄にどの意味が最適であるか、一つ一つ選んでいく。

まず①・⑤の語はいずれも副詞で、それぞれの意味は次のようになる。①「さまざま」は「あれこれ、いろいろ」、②「さはさは」は「さはやか」の「さは」を重ねた語で、「さっぱりと、すっきりと」、③「きらきら」は「光り輝くさま、キラキラ」、④「さらさら」は「物が触れ合って出る音、さらさら、ざわざわ」、あるいは「ますます、あらためて」、また下に打消の表現を伴って「けっして、まったく」といった意味がある。⑤「とくとく」は副詞「疾く」を重ねた語で、「早く早く、さつさと、急いで」という意味になる。

次に空欄箇所をみていくと、Bは蔵人が宣旨によつて聖を呼びに行った場面で、「参るべき(参内せよ)」「へ続く意味としては「とくとく」が最適。帝の命令なので即刻参内しろ、というのである。Cはするように蔵人から言われた聖の反応を描いたところで、「動きげもなければ」とある。「なけれ(なし)」という打消の語があることをヒントに、ここでは「さらさら」が最適。急げと言われたにもかかわらず、まったく動く気配がないのである。Fは夢うつつの帝が何かを目にした場面で、「ある物」がどのように見えたのか、と考える。「ある物」は結局、「剣の護法」ということが後でわかるので、「きらきら」が最適。剣が光って見えたのである。Gはその剣の護法を見た時の帝の気分を描いた箇所。「いささか心苦しき御事もなく」とあることからわかるように、帝の病気は治ったのである。そこで、「さはさは」が最適。帝の気分はすっきりとさわやかになったのである。したがって、これらの組み合わせとして正しいものは(E)となる。

問3 読解問題。空欄は会話文中にある。場面や状況、会話主を正確に押さえた上で、この会話で何を言わんとしているのかを読み取る。選択肢も古文なので、単語の意味に気をつけながら、正確に読解する必要がある。

空欄は、蔵人の会話文中にある。ここは、帝の命令によつて聖を召しにきた場面である。宣旨を伝えたのに、聖は「何のために

召すのか」と言つて動く氣配がない。そこで、藏人が聖に向かつて言つたのが、この会話文である。まず、最初の「かうかう」は、「かくかく」のウ音便で、「かくかくしかじか、こうこう」という意味である。空欄の後の「祈り参らせ給へ」は「お祈り申し上げなさってください」という意味なので、この「かくかくしかじか」は、聖の「何のために召すのか」という質問に対する答への説明であると同時に、聖に祈つてほしい理由説明でもある。聖を召す理由は、帝の病氣を治すためである。

そこで、選択肢を順に吟味してみる。(ア)は「帝の(が)重い病氣である」と口語訳でき、(イ)は「御悩みは重くていらつしやいます」と口語訳できる。(イ)の「御悩み」とは帝の病氣の苦しみと解釈できる。そこで、内容的には(ア)も(イ)も同じことを言っていて、帝の病が重いと言うことで祈禱が必要だと聖を説得していることになる。空欄にあてはまる内容としてはどちらも適切だが、どちらがよりふさわしいかと考えると、病氣が重いという(ア)の客観的説明よりも、帝がひどく苦しんでいらつしやると病氣による苦痛を述べる(イ)の方が、聖の気持ちに強く働きかける効果があると思われる。したがって正解は(イ)となる。

なお、(ウ)の「恐れ多い宣旨であります」というのでは、帝の権力をもつて聖を召し出そうとしている印象があり、ここでは不適切。やはり、本来の召し出す理由に基づいた説明が望ましい。(エ)は「剣の護法を参上させよ」とあるが、「剣の護法」に関しては、この後、聖の口から明らかにされることなので、ここで藏人が知っているとは考えられず、やはり不適切。(オ)の「聖の様子は格別尊くすばらしい」は、聖をほめたたえることで、聖の氣をよくさせ、参上させようとの意図が読み取れるが、(ウ)同様、やはり召し出すそもその理由、せつばつまった理由説明が望ましい。また、ほめるにしても、「さま(様子)」ではなく、聖の持つ力、効験について触れるべき。そこで(ウ)も不適切となる。

#### 問4 解釈問題。傍線部を正確に口語訳した上で、主語を補ったり、指示語の内容を明らかにしたりして、前後の文脈から正しい内容を掴む。

を掴む。

まず、傍線部の「たが」は漢字で表すと「誰が」となり、「誰の」という意味。「しるし」には「効験、ききめ」という意味がある。ここでの「しるし」は、前の文を受けて、帝の病を治すための祈りのききめということになる。「知らせ給はず」の「せ」は尊敬の助動詞「す」の連用形と考えられ、ここは「せ給ふ」の二重尊敬が用いられているので、主語は帝になる。「とも」は逆接仮定を表す接続助詞で、「たとえ〜でも」という意味である。そこで、傍線部を直訳すると、「たとえ、それが誰の祈りのききめかということ帝が知りにならないとしても」となる。したがって正解は(オ)になる。

なお、(ア)は「しるし」を「結果」と解釈している点が不適切。「しるし」には「結果」という意味はない。(イ)は「帝にお知らせ申し上げなくても」と文中の「知らせ」の「せ」を役の意味で解釈しているので不適切。前の文で「いかで聖のしるしとは知るべき」と「知る」という表現が用いられているので、やはりここでは帝に知らせるのではなく、帝ご自身が知るという意味に解釈する方がいい。(ウ)の「証拠」は「しるし」という語が持っている意味だが、「お知らせ申し上げなくても」と(イ)同様、役の意味で解釈している点が不適切。(エ)は「おわかりになれますならば」と「とも」を単なる仮定条件で訳している点、また「ず」の打消の意味が含まれていない点が不適切。

#### 問5 主語を問う問題。一般には文脈をたどって考えるが、敬語の有無がヒントになることもある。

「御覽ぜ（御覽す）」は「見る」の尊敬語で、「御覽になる」という意味。そこで、主語は身分の高い人ということがまずわかる。もつともここは会話文なので、地の文よりも敬意が高く用いられる場合があることに注意する。傍線部は聖の会話文中にあるが、聖はここで、帝の御病気が治った場合、それが自分の祈禱のききめであることを明らかにするために、祈禱の際に剣の護法を参上させよう、と提案する。そこで、「御覽ぜば」とは、「もし剣の護法を御覧になったならば」という仮定であるが、それを見る状況として「御夢にも、まぼろしにも」とある。夢や幻で見るというのは、意識がはっきりしていない人の場合で、ここでは、重い病気になるしんでいる帝が該当する。したがって正解は(ア)の御門（帝）となる。なお、主語を藏人と考え、「あなたが御覧になったならば」と解釈することも不可能ではないが、選択肢を見ると、(ウ)藏人の他に(エ)勅使とある。ここでは、藏人が勅使に当たるので、(ウ)と(エ)は同一人物。そこで、「一つ選びなさい」という問題では、どちらも正解にはならないことがわかる。

#### 問6 文法問題。呼応の副詞の問題。選択肢は助動詞と助詞である。一般に空欄に語を入れる場合は、接続を考えるが、空欄の上に呼

応の副詞がある場合は、空欄に当てはまる語はそれに呼応する語になるということ、かなり考えやすくなる。

空欄を含む一文「我はさらに京へはえ出で」をみると、「さらに」と「え」が呼応の副詞で、打消の語と呼応する。「さらに」打消で「まったくない」、「え」打消で「できない」という意味になる。そこで、選択肢から打消の語を選ぶと、(ア)の「ず」と(エ)の「じ」になる。(イ)の「ぬ」も打消の助動詞「ず」の連体形と考えられるが、空欄は文末で終止形があてはまるため、これは不適切。「ず」と「じ」を比較した場合、「ず」は単なる打消であるが、「じ」は打消の推量か打消の意志を表す。ここは、聖の会

話文中で、「我は」で始まるこの一文は自分の意志を述べていると考えられるので、「じ」の方が適切。したがって正解は(エ)となる。  
なお、この一文は「私はまったく京へ出るつもりはない」という意味になる。

#### 問7 □語訳の問題。品詞分解をしながら、単語の意味を正確に訳出する。

「ちと」は程度・量・時間などがわずかであるさまを表し、「ちよつと、少し」という意味になる。「まどろま」はマ行四段活用  
の動詞「まどろむ」の未然形で、「うつらうつらする、うとうと眠る」という意味。文脈から傍線部の主語は帝と考えられるので、  
「せ給ふ」は、尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」に尊敬の補助動詞「給ふ」が接続したもので、二重尊敬を表している。「ともな  
きに」は格助詞「と」に係助詞「も」、形容詞「なし」の連体形「なき」、格助詞「に」が付いたもの。「に」は、ここでは接続助  
詞と考えるよりも、その後記されている「ある物が見えた」時を表す格助詞と解釈する方が適切。そこで、傍線部を直訳すると、  
「少しうとうとなさるといふこともない時に」となる。これは、帝がうとうと眠りなさったかなさらなかったか、はっきりしない  
あいまいな時を表している。つまり、夢かうつつか、という状態を指しているのである。そこで、指定字数にあてはまるよう、表  
現を工夫して、たとえば「少しうとうとなさったかなさらなかったかという中で」、あるいは「少しうとうとなさったかという夢  
うつつの中で」などとなる。なお、主語の「帝」は指定字数を考慮して、字数が不足している場合には補えばよい。

## 【問題】（演習）

出典：会田雄次『日本人の意識構造』／秋田大学・改

## 文章略解

日本では昔から、自分の立場を捨てて親の好きなようにさせるのが親孝行であるという考え方があった。これは、人は誰も「絶対者」ではなく、「相対的」な立場にあるという前提のうえで、「察し」と「思いやり」の人間関係を成立させてきたことによるものである。戦後の民主化によって、これらの人間関係は封建制の産物などとされて否定されてしまったが、それは、はるか昔からの日本社会の基要素であった人間関係を否定したことになるのではないかと述べている。

## 解答

- 問1 ①＝指摘 ②＝余裕 ③＝侵略 ④＝偏重 ⑤＝維持

問2 自分も親もお互いの立場の上では、どちらも正当なものになるから、絶対的な正しさはないので、自分の意志を相手に押しつけずに、自分を抑えて相手を認めること。〔解答例〕

自分の立場も正当ならば親の立場もまた正当なものであり、一方的な立場での判断は独善であると悟ることにより、自分自身を自分から突き放すことで相手の意を体現すること。〔別解例〕

問3 日本の社会関係が、直接に絶対者と結合させる信念を持つことをせず、「察し」と「思いやり」の人間関係で成り立ち、感情感覚の波長と発現の方向を共にする一民族国家であること。〔解答例〕

**問4**

日本社会の「察し」と「思いやり」の人間関係は、徳川時代よりもっと古くからはつきり見られる特質であり、いちばん典型的だといわれる西欧のフランスやドイツの封建時代には、どこにも発見できないから。〔95字・解答例〕

【問題】（自習）

出典：佐藤信夫『レトリック認識』／京都女子大学・03年・改

文章略解

レトリックのあやの中でもきわめて基本的で目立ちやすい《対比》表現は、昔から洋の東西を問わず、ことわざや格言に多く使われている。しかし、この対比表現は口あたりはいいが、心に印象を残すこともなく、安易に作られるといったことなどから、昔からあまり評判がよくなかった。パスカルも対比表現に対する皮肉を他ならぬ対比形式を用いて書いている。そのような書き方そのものの中に、（対比形式の必要性を認めてはいるが、それをそのまま表すことはしようとしな）パスカル的な、本質的にレトリカルな思考がみとれる。

解答

問1 ①＝格言

②＝ぞく

③＝ふう

④＝看板

⑤＝世間

⑥＝大半

⑦＝ひょうばん

⑧＝し

⑨＝皮肉

⑩＝しゅうち

問2 a＝(イ)

b＝(エ)

問3 A＝みぐるしとて

B＝文書きちらす

C＝うるさし

問4 D＝(イ)

E＝(ウ)

問5 それほど心に印象を残さず消えていく点。

手軽に、安易にこしらえられる点。

作られたものが氾濫している点。

問6

(1) Ⅱイ

(2) Ⅱオ

問7

正しく話すこと

／ 正しいかたちをこしらえること

問8

内容的には本来は対比表現にする必要がないのに、形にこだわり表面的な美しさのためだけに無理に対比表現を作ること。

解説

問1

① 「格言」とは人間の生き方を端的に表した古人の言葉。

② この「俗」は「世間一般の」とか「ありふれた」の意味をもつ。

③ 文脈上、印象や様式の意味で使われている時の読み方は「かぜ」とは読まず「ふう」と読む。

⑥ 「大半」とはもともとは全体の三分の二の意味で「小半」が全体の三分の一の意味であったのが転じて、全体の半分をはるかに越えた数量を指すようになった。

⑧ 強制という熟語などが思い浮かぶとよい。

⑨ 「皮肉」とは、相手を批判したりするときなどに、事実と反対のことを言ったりして、意地悪く遠回しな表現をとること Ⅱ  
アイロニー。

問2

古語の知識が必要となる問題である。

a 「手」をどの意味でとるかであるが、「手」には、①上肢、②器具などのとって、③働き手・人手、④筆跡・文字、⑤調子・曲、⑥手段・方法、⑦手しおにかけること・世話、⑧方角・方向などの意味がある。ここでは下に「書く」という語があるので④の意味であり、従って解答はイ。

b 「うるさし」には①わずらわしい・面倒だ②いとわしい・嫌な感じだ③すぐれている④細かいことにもよく気がつくなどの意がある。ここでは、書く文字がみつともないとして、人に書かせたりするのは「うるさし」という文脈なので②をとる。従ってこれに一番近いのはエ。

問3 徒然草第三十五段の引用文自体が《対比》表現になっているので、この中からそれぞれ対比となっている部分を抜き出すのはそれほど難しくはない。左の各対応ブロックを参考にするとよい。

手のわろき人の

|    |        |   |    |        |   |    |       |
|----|--------|---|----|--------|---|----|-------|
| 1  | はばかりず  | + | 2  | 文書きちらす | + | 3  | よし。   |
| 1' | みぐるしとて | + | 2' | 人に書かする | + | 3' | うるさし。 |

問4

**D** の選択肢は、「…と考える人」がいることに対し、(ア)と(ウ)は否定的で（そんな人はいるはずないという意味になり）、(エ)と(オ)は無関心で（そんな人がいても逢うつもりもなくどうでもいいという意味になり）、(イ)だけが肯定的である。この**D**を含む文脈は、名文句・殺し文句などには、対比表現が多いという認識をもとに、逆に対比形式をつくれれば名文句ができると考える人がいるだろう、というもので、従って解答は(イ)となる。

**E** で筆者は、パスカルが対比表現を批判するにあたり、その見解をほかならぬ対比表現で書いたのは、模範的な対比表現のお手本をさりげなく示そうとしたのだ、という考えを否定しているのである。**E** の直前の「くだろうか」の「か」は単なる疑問を表す助詞ではなく、反語を表す助詞である。これをもとに**E** に入れる語として適切なのは(ウ)と決める。

問5

本来「もの」（物質）に関して用いる「製造」や「消費」という語を、ポスターやカンバンで用いられている「言語表現」（非物質）に用いたとすると、この「言語表現」の特徴の中に、「消費」や「製造」という語のもつ意味内容と共通するものがあるからである。そこでポスターやカンバンで多用されている「言語表現」⇨対比表現の特徴について述べている次の段落の中から「消費」や「製造」に通じる箇所を拾い出していけばよい。具体的には、

- ・消費⇨心に印象を残さない（でその表現が消えていく）。
  - ・製造⇨手軽に、安易にこしらえられる。
  - ・製造⇨（作られた）対比句が氾濫している。
- となる。

問6 「賢明」という語の意味は、本来は「賢く道理にかなう様子」である。しかし、この文脈においては筆者は字義通りには使っていない。

(問1の⑨で解説した) まさに皮肉な表現をとっているのである。つまり、「選者の期待するスローガンが対句表現だと察しをつける応募者のことを本当に賢明だと称賛する気持ちなどなく、むしろ否定的な気持ちをもって、それを「賢明」という表現を用いて皮肉っているのである。よって(2)の答えは(オ)。これをもとに(1)の選択肢をみてみると、

(ア)は、くさえで、きる、応募者の頭の優秀さ、となっており、応募者をほめているので逆となる。

(ウ)は、方向性としてはあっているが、選者の意図を見抜いたつもり、の、応募者の頭の劣悪さ、が傍線部dの前に書かれている内容とずれるので×。本文では、応募者たちは標語の応募に際し、実際に選者たちが期待しているのが何かということを見抜き、当選しているのであり、それが(ウ)だと選者の意図をまったく見抜いていないということになるので×。

従って(1)の解答は(イ)。

問7 パスカルの言葉の中から対比形の表現となつていところを抜き出す問題であるが、対比形となつていところは一箇所しかない。

い。文構造を見れば一目瞭然である。

Aは、( X ) ではなく、( Y ) なのだ。

この( X ) と ( Y ) の内容が対比内容となる。

本文では( X ) が正しく話すこと、そして( Y ) が正しいかたちをこしらえること、となっている。

問8 この問題は比喩表現を本文の文脈に即してストレートな表現に直す問題である。この問題を解くための手順は、比喩表現がもつ

ている象徴的な意味を考え、それが喩えられているものとどうつながるかを考えて、比喩の部分を適切な表現に直していくのである。例えば、

a 君のほほは b リンゴのようだ。

という表現があった場合を考えてみるとどうなるだろうか。

この文ではaの「君のほほ」について、どのような様子をしたほほであるかを表したのである。そこで、初めからそのほほの様子を直接表す語を用いて表現してもよかったのであるが、bのように比喩表現を使うことで、読み手に、直接表した表現よりも、

より具体的でわかりやすいイメージをもたせようとしているのである。この場合、ほほをリングで喻えることで、読み手にまず「赤い色」をイメージさせることができる。次にその「赤い色」のイメージが、**a**の「君のほほ」の様子を表すものとしてつながり、**a**の「君のほほ」は「とても赤い色をした血色のよい健康的なほほ」という様子をしているものとして読み手は捉えるのである。

従って、この文も比喩を用いずにストレートな表現に直すならば、「君のほほは、赤い色をした血色のよい、とても健康的なほほだ」となるのである。

この図式を本文にあてはめてみると、

**a** ことばに無理を強いて対比表現をこしらえる人々は、**b<sub>1</sub>** 対称形のために **2** 見せかけだけの **3** 窓をこしらえる人々のよう  
だ。

となる。この**b**の部分順に**a**とのつながりを考えながら比喩を用いずに言い換えていくと、

**b<sub>1</sub>**は、「対称形のため（だけ）」に「窓をつくるのだから」、「内容の本質からすると本当は（**a**の対比表現は）不要なのに」つくっているということになる。

**b<sub>2</sub>**は、「見せかけだけの」窓というのが、どんな窓であるのかを考えると、「内容を伴わず表面的な美しさのためだけにつくられた」窓ということになる。

**b<sub>3</sub>**は、建物における「窓」は**a**における「対比表現」に直せる。これら**b<sub>1</sub>**、**b<sub>3</sub>**をつなぐと解答のようになるのである。



出典：『韓昌黎文集』「猫相乳」／大東文化大学・改題・03年

## 書き下し文

司徒北平王の家の猫に子を生むこと日を同じくする者有り。其の一死せんとす。二子有りて死せんとする母に飲む。母且に死せんとし、其の鳴くこと啾啾たり。其の一方に其の子に乳するに、之を聞くがごとく、起ちて之を聴くがごとく、走りて之を救はんとするがごとし。其の一を銜へて、其の棲に置く。又往きて之のごとくす。反りて之に乳すること、其の子のごとく然り。噫、亦た異の大きな者なり。夫れ猫は人畜なり。仁義を性とする者に非ざるなり。其れ畜ふ所の者に感じたるか。北平王は人を牧むるに康を以てし、罪を伐つに平を以てし、陰陽を理へて、以て其の宜しきを得たり。

## 現代語訳

司徒である北平王の家の猫に、同じ日に子を生んだ（二匹の）猫がいた。そのうちの二匹が死にそうになった。（その死にそうになった猫には）二匹の子猫がいて、その死にそうになっている母猫の乳を飲んでた。（そして、その）母猫が今まさに死にそうになり、その鳴き声は悲しげであった。もう一匹の母猫はちやうど自分の子に乳を飲ませていたが、その鳴き声を聞いているようであった。（そして）起き上がりその声に耳を傾けるようにし、走っていつて救おうとしているようであった。（死にそうになっている母猫の子猫のうち）一匹をくわえ、自らの居場所に置いた。もう一度行き、同じようにもう一匹の子猫をくわえて連れてきた。（そして）自分の居場所に戻り、（その子猫たちに）乳を与える様子は自分の子に与えるのと同様であった。ああ、人とは異なる種ではあるが高徳の者である。そもそも猫は人に飼われる家畜である。仁義を本質として持つ存在ではない。その猫は飼い主に感化されたのだろうか。北平王は人民を治めるのに安らかな心を用い、罪を罰するのに公平をむねとし、陰陽を調和させることで、その適正さを獲得したのである。

問 1 ははまさにしせんとし

問 2 オ

問 3 イ

問 4 エ

問 5 (A)〓イ (B)〓ア

(クラス授業専用問題) その猫は飼い主に感化されたのだろうか

問 6 ウ

特別問題

そもそも猫は人間に飼われる家畜である。仁義を本質として持つ存在ではない

出典：『説苑』『立節』／ 学習院大学・文学部

書き下し文

曾子弊衣を以て耕す。魯君人をして往きて邑を致さしむ。曰はく、「請ふ此を以て衣を修めよ」と。曾子受けず。反りて復た往く。又受けず。使者曰はく、「先生人に求むるに非ず、人則ち之を献ず。奚為れぞ受けざる」と。曾子曰はく、「臣之を聞く、『人に受くる者は人を畏れ、人に予ふる者は人に驕る』と。縦ひ子賜ふこと有りて、我に驕らずとも、我能く畏ること勿からんや」と。終に受けず。孔子之を聞きて曰はく、「参の言は、以て其の節を全うするに足るなり」と。

現代語訳

曾子は破れた（粗末な）衣服を身につけて耕作をしていた。魯の君子が人を曾子の元に遣わし領地を贈らせた。（使者が）言うことには、「どうかこの領地（からの収入）で衣服を整えてください」と。（しかし）曾子は（その領地を）受け取らなかつた。

（使者は）一度帰ってから再び（曾子の所へ）おもむいた。（しかし曾子は）今度もまた（領地を）受け取らなかつた。使者が言った、「先生が相手に向かって（領地がほしいと）お求めになったのではなく、相手が（進んで）領地を（先生に）さしあげようというのです。（それなのに）どうしてお受け取りにならないのですか」と。曾子は（それに答えて）言った、「私の聞き知るところでは、『人から物を与えられた者はその人を畏れはばかり、人に物を与えた者はその人に対しておごり高ぶる』ということです。仮にわが君が（領地を私に）お与え下さって、（私に対して）おごり高ぶることはなさらないとしても、（領地をいただいた）私としては（わが君に対して）畏れははからずにいることができましようか（いいえできません）」と。（そしてそのまま）最後まで（領地を）受け取らなかつた。孔子はこのことを聞いて言った、「曾参（曾子）の言葉は、たしかに彼自身の節操をつらぬいたものといえよう」と。

解答

問 1 (1) 破れた粗末な服

(2) 贈る

〔いずれも解答例〕

問 2 (3) ㊦

(4) ㊧

問 3 われにござらずとも

問 4 先生〔本文3行目〕・臣〔4行目〕・我〔4行目〕・我〔5行目〕・参〔5行目〕・其〔5行目〕

問 5 (イ)

問 6 (ア)

解説

問 1 (1) の「弊」は、日本語でも、「弊社」のように謙遜するときに使われるので、いい意味ではないことはわかるはず。「疲れる」(この意の場合は「つかル」と訓読する。〈例〉「疲弊」、「苦しむ」(この場合は「くるシム」と訓読。〈例〉「困弊」) という意味以外に、「破れる・壊れる」(この場合は「やぶル」と読む。〈例〉「弊布」「弊屋」という意味もある。(1) の場合は「衣」を修飾していることから、「弊る」の意味である。「弊衣」は「破れたぼろ服」ぐらいの意。それぞれの意味に対応した熟語を覚えておくとい。また、「弊」を「幣(＝貨幣)」と間違えないように。

(2) の「致」についても、熟語から、意味および読みを考えよう。「送り届ける」(〈例〉「送致」)、「招き寄せる」(〈例〉「誘致」)、「いたらせる」(〈例〉「致死」) ぐらいは覚えておいてほしい。読みはすべて「いたス」でよい。ここでの意味は、「邑(＝領土)」を「曾子」に「贈った」と考えられる。解答は、「贈る」の意味であれば、他の表現でもよい。

問2 (3)について。まず、「反復往」の主語は誰かを考える。(3)に続く「又不<sub>レ</sub>受」の主語は、「又」とあることから、(3)の前の「曾子

不<sub>レ</sub>受」と同じ「曾子」である。そしてこれに続いて、「使者曰、……」とあるのだから(3)の主語は「使者」とわかる。(3)の前で「曾子」に「不<sub>レ</sub>受」と拒絶され、後で「又不<sub>レ</sub>受」と拒絶されているのだから、(3)は「使者」が「復(「もう一度」)」「曾子」に会いに來たと書かれていると判断できる。この段階で、(エ)「反対の方向に行った」は×。また(ア)「幾度も幾度も」は、「反復」を「はんぷくシテ」と読んでいると考えられるので×。「反」は動詞で「かえル」と読み、「戻る」の意である。したがって(イ)が正解。(ウ)「幾度断つても」ととると、主語が「曾子」になるので不適切。またやはり「幾度」と、「反復」を「はんぷくシテ」の読みで解釈をしているので不適。

(4)について。「奚<sub>なんす</sub>為れぞ」は「どうして」の意で、疑問または反語の表現。(4)は、「使者」の発言の末尾で、この発言に対して、「曾子曰、……」と、「曾子」が理由を答えているのだから、これは反語ではなく疑問。(4)は疑問文だから、訓読する場合、「不受」は、「不<sub>ざル</sub>受」と、「ず」を連体形にする。選択肢は、(ア)・(イ)は「奚<sub>なんす</sub>為」の解釈が違っているので×。(ウ)は反語、(エ)は疑問の表現であるから、(エ)を選ぶ。

問3 断定の「也」が文中にある場合、「や」(音読み、疑問・反語の係助詞「や」ではない)と読むか、読まないで置字扱いにするか

どちらかである。この場合は置字にする他ない。なぜならば、(5)の上に接続詞「縦<sub>たとひ</sub>」があり、これを受ける助詞「トモ」が必要だからである。「驕」は「驕慢」などの熟語から、「おごル」と読む。注意して欲しいのは「我」の位置である。(5)は、主語が「子(「魯君」)で、「驕」が述語である。「我」は「驕」の補語として「我ニ」と読む。「驕」は目的語を取らないから、補語とみなすのが適当である。肯定文ならば、「(子)驕我」という順序になるが、否定文で、補語・目的語が代名詞の場合、倒置して、述語(動詞)の前に置かれるのである。

書き下し文にする際、「トモ」は終止形接続であるから、「不」は「ず」と読む。訓点を施すと、「不<sub>ザトモニ</sub>我驕<sub>オハル</sub>也」となる。「驕」は四段活用。すべてひらがなになると、「われにおごらずとも」となる。

問4 読解の際の基本である。「あらわれた順序で」と「すべて」という二つの条件に注意すること。

まず、登場人物を掴む。「曾子」「魯君」「使者」「孔子」の四名である。登場人物の言い換えに注意。代名詞が使われるだけでは

ない。

本文1行目の「魯君使<sup>二</sup>人往致<sup>レ</sup>邑焉」の「人」は、「使者」のこと。1・2行目「曾子不受」の「曾子」は、設問で「曾子を除いて」と指示されているので無視。3行目の使者のセリフに注目。「先生」というのは尊称の二人称。当然、「曾子」のことを指している。「使者」は、「魯君」の命を受けて「曾子」に会いに行つたからだ。「先生非<sup>レ</sup>求<sup>二</sup>於<sup>レ</sup>人、人則献<sup>レ</sup>之」の「人」は、一般的な人と解しても良いが、ここでは「魯君」とする。次に4行目「曾子」のセリフを追う。「臣聞<sup>レ</sup>之」の「臣」、傍線部(5)の「不我驕也」の「我」、「我能勿<sup>レ</sup>畏乎」の「我」という人称代名詞に着眼する。これらはすべて一人称なので、「曾子」のことを指している。注意が必要なのは、「すべて抜き出して」の条件に合わせて、「我」を二つ書くこと。そして最後は、5行目の孔子の言葉である。「参<sup>レ</sup>之言」とあるが、「参」は人名。直前に「孔子聞<sup>レ</sup>之」とあることから、「参」は「曾子」としか考えられない。「参」は「曾子」の名である。

## 問5

曾子の会話文の内容がわかればまったく問題はないはず。曾子の会話文は、本文4行目「臣聞<sup>レ</sup>之」から5行目の「我能勿<sup>レ</sup>畏乎」まで。人が人から物を受け取るとその人に対して引け目を感じるといふ真理を述べている。最後の「我能勿<sup>レ</sup>畏<sup>ル</sup>乎」は反語の構文。「我不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>畏<sup>ル</sup>」(「私も引け目を感じざるを得ない」)の意味になる。つまり「曾子」自身も、「魯君」から贈り物をもったら、引け目・負い目を感じると言っているのである。したがって(イ)が正解。(ア)・(ウ)・(エ)はすべてこう考えられる根拠が文中にない。

## 問6

評価をするということは、単純に言えば、「良い」か「悪い」かどちらかに決めることである。ここでの孔子の評価はどちらであらうか。「足<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>全<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>節<sup>ヲ</sup>也」の意味を考える。「足」は「十分だ、満足だ」の意味。「全<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>節<sup>ヲ</sup>」は、「その節度を通し抜く」の意。「其」の指示内容は、主語が「参<sup>レ</sup>之言」だから、「参」つまり「曾子」のことである。したがって、この部分は、「曾子は自分の節度を最後まで通した」という意味になる。つまり、孔子は良い評価を与えたと考えられる。すると、批判している(イ)・(ウ)は該当しない。(エ)は「魯君の無礼」が言い過ぎであるし、「足<sup>ル</sup>以<sup>テ</sup>全<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>節<sup>ヲ</sup>也」は、曾子自身に対する直接的な評価なので「魯君」は関係ない。よって、(ア)が正解。



会員番号

氏 名